二〇二二年度　樟蔭中学校　入学試験　問題用紙（A入試）【国語】

二〇二二年一月十五日　実施

※解答は解答用紙に記入すること。　〔六枚のうち　その一〕
※句読点（、。）や記号などは、すべて一字として数えます。

【一】　つぎの文章を読み、あとの問いに答えよ。

二年生になったアケミは、ちゃんと定時に学校へ通うようになった。というのも、クラスの子たちは同じだが、担任が変わり、ものすごく厳しい女の先生になったからだった。これまでの先生は丸顔でぽっちゃりしていて、髪の毛はパーマをかけてふわっとさせていて、とっても優しかった。いつもにこにこ笑っていた。しかし今度の先生は、顔が細く髪の毛を後ろでひっつめにしていて、いつも斜め上をにらみつけているような顔をしていた。いつも紺色の服に白いブラウスを着ていて、スカートとズボンの間のような、股割れスカートをはいていた。まるで怖い男の先生が女の格好をしたみたいだった。

（これはまずい）

[A]にアケミは悟った。これまでみたいにやりたい㋐ホウダイできないと悟り、なるべく目立たないようにと、おとなしくするようになった。そんなアケミの変化に対して、クラスの子たちは何もいわなかった。アケミは目立たない子として、二年生をすごそうと決めたのであった。

相変わらず成績はよかった。漢字はみんな読み書きができたし、社会も算数もできた。ただ学校からジャガイモの種芋をもらってきて、それの芽を出させるという宿題には困った。アケミは植物を観察したり世話をするのが大の苦手だからであった。

「ジャガイモの芽を出す宿題が出た」

などと両親には報告しなかった。報告すると事あるごとに、

「あれはどうした、ちゃんとやったのか」

といわれるからである。アケミは学校からもらってきた種芋が植えてある植木鉢を、そっと庭に置いた。学校から家に持って帰る間は、

「ちゃんと水をやらなくちゃ」

と思ったのだが、庭に鉢を置いたとたんに㋑キョウミは失せた。毎日、水をやり、観察しなければならない。それはアケミの日常でやることがひとつ増えることだ。それもやりたいことではない。アケミは忙しかった。テレビを見なくちゃいけないし、ピアノの練習もしなくちゃいけないし、本も読まなくちゃいけないし、近所の原っぱで遊ばなくちゃいけないし、漫画を写さなくちゃならなかったし、家の前のドブでイトミミズ採りもしなくてはならなかった。それにジャガイモの水やりが加わる。

（①面倒くさ）

アケミは植木鉢はもらってこなかったことにして、縁側に面した戸をぴたんと閉めた。

学校に行くと先生が、

「みんな、ジャガイモの世話をしていますね」

とにこりとも②しないでいった。

「はあい」

「はあい。はあい」

教室の後ろのほうに座っている男の子が、中腰になって右手を上げてわめいている。

（うるさいなあ、ばっかじゃないの）

アケミはちらりと後ろを振り返って、^A口をとがらせた。

「ちゃんと世話をするんですよ。後でノートを出してもらいますからね」

斜め上を見ながら、先生はきっぱりといった。

「はあい」

アケミはちらちらと周囲を見ながら、

（みんな元気がいいな。みんなの家にある植木鉢からは、ちゃんと芽が出ているのかなあ。きっとそうだ。だからみんなあんなに張り切っているんだ。うちにある鉢はいったいどうなっているんだろうか）

いったいどうなっているかといっても、世話をするのはアケミしかいないのだから、本人が何かしなければ③誰も世話をする人間はいない。

アケミはちょっと気になって、同じクラスのシゲコちゃんに、

「今日、遊びに行っていい？」

と聞いた。なぜそれほど親しくもないシゲコちゃんの家に行くことにしたかというと、家が㋒ショウバイをやっているので、お父さんとお母さんが店にかかりっきりになり、子供たちをほったらかしにしていてくれるからだった。シゲコちゃんは無表情で、

「うん、いいよ」

とぼそっといった。

【　中略　】

アケミは部屋の中をきょろきょろし、

「ねえ、ジャガイモどうした？」

と聞いた。窓から庭を見下ろしたりもしてみた。

「ああ、宿題？」

「そう」

「ほら、ちゃんと水をやってるよ」

そういいながら彼女は机の下から鉢を出してきた。小さい芽も出ている。

「あ……。ほんとうだ……」

④アケミの声はだんだん小さくなった。

「⑤芽が出るかなって心配してたんだけど、やっと出てきた」

彼女はとってもうれしそうだった。アケミはそーっとジャガイモの芽に触った。いかにも「がんばって芽が出ました」という感じがした。

「アケミちゃんのは？」

にこにこしながらシゲコちゃんは聞いた。まさか庭に放りだしてあるとはいえなくなり、

「まだ芽が出ないんだ」

と答えた。

「ふーん、どうしてかな。水、ちゃんとやってる？」

まるで先生にいわれているみたいだった。

「う……ん」

だんだんアケミの声は小さくなってきた。シゲコちゃんは鉢植えをちゃんと世話しているらしく、鉢も鉢を載せているお皿も、全然土で汚れていなかった。

「あのね、毎日ね、早く芽が出ろって話しかけると出るよ。アケミちゃんもいってごらんよ」

シゲコちゃんは慰（なぐさ）めてくれた。思っていたよりもずっと優しい子だった。

「うん、そうだね」

アケミはジャガイモの鉢については考えるのをやめ、シゲコちゃんの部屋を見回した。本もほとんどなかったし、ぬいぐるみもおもちゃも、特別、目をひく物はなかった。

しばらく二人は畳の上にぺったり座って、黙って見合っていた。窓の外からは、シゲコちゃんのお父さんがお客さんを呼び込む声と、お母さんの、

「毎度ありがとうございます」

という元気な声が聞こえていた。ふだんあまり仲よくしているわけではないから、話はそれほど弾まない。アケミはジャガイモの鉢だけを調べればよかったのだが、だからといってすぐに、さよならと帰ってくるのは気がひけた。

【　中略　】

一時間半後、家に帰ったアケミは、庭に直行した。どういうわけだか鉢が転がっている。雨が降ったりしたものだから、泥にもまみれていてとても学校の宿題がそこにあるとは思えないくらい汚い。⑥アケミはしばらくそこにしゃがんでいた。

「何してんの」

突然、背後から母の声がして、アケミはびっくりして振り返った。

「何もしてないよ」

※句読点（、。）や記号などは、すべて一字として数えます。

「あんた、それ、学校の宿題じゃないの？」
母は㋓ケワしい顔でいった。
「⑦買い物に行ったときにナガイケくんのお母さんに会ったら、ジャガイモの鉢植えの宿題が出たっていうじゃないの。鉢植えが転がってたのもわかってたし、いつになったらちゃんと面倒を見るのかと思ってたら、ずっとほったらかし」
アケミが黙っているのをいいことに、母はぶつぶつ㋔モンクをいった。
一年生の最初のころはよかった。ただ立っていれば服は着せてもらえたし、教科書やノートや筆箱など、その日の授業で必要な物がすべて揃（そろ）えられた赤いランドセルを背負わせてもらえる。まるで⑧お姫様のような毎日だった。
（あれだけのことをやってくれたんだから、水くらいやってくれたっていいじゃないか）
口に出してはいえないので、アケミは腹の中で反論した。
「どうすんの！」
⑨母は鬼のような顔で、部屋から見下ろした。赤い運動靴を植木鉢の上に載せ、アケミはごろごろと転がした。
「やめなさい。足でそんなことをするもんじゃありません」
ここぞとばかりに、母は自分を叱っているような気がしてきた。
（絶対にこの人は私の本当のお母さんじゃないわ。ふだんからみんなに似てないっていわれるし。本当のお母さんだったら、こんなに私のことを叱るはずはないもん）
相変わらず母はにらみつけている。
「さっさと植木鉢をどうにかしなさい。そのままじゃどうしようもないでしょ。お母さんは手伝わないからね！」
とってもまずい状態になっていた。しかしここで庭に転がった、汚れた植木鉢を手にして部屋に戻るのは、母に対して敗北を意味していた。⑩そういうことは絶対にしたくなかった。アケミはしばらく両手のこぶしをにぎにぎしていたが、突然、
「くーもと一緒にあの山こーえーてー」
と「てなもんや三度笠」のテーマソングを大声で歌いながら、スキップをしてその場から逃げ出した。
「こら、どこへ行くの！」
母の声が背後で聞こえた。
「そんなこと知らないよん」
小声でつぶやいた。アケミはいったいどうしようかと考えながら、［Ｂ］町内をスキップして回った。
頃合いを見計らって家に帰った。母は台所で晩御飯の用意をしているようだ。そーっと玄関を開けた。母はちらりとアケミのほうを見たが、何もいわずにまな板の上で野菜を切り続けた。ひょいひょいと爪先で自分の机まで歩いていくと、⑪机の上にはでーんと植木鉢が置いてあった。あわてて庭を見るとさっきまであった植木鉢はなくなっている。今いちばんそばで見たくない植木鉢。アケミは思わず顔をそむけた。またそーっと目を向けると、やっぱりそこに鉢はある。
（何だよ）
アケミはむっとした。そしてぐいっと鉢を机の隅に押しのけた。押しのけたといっても、机の上は本や紙やおもちゃが散乱していて、机の役目を果たしていなかった。
（やだやだやだ）
彼女は天文図鑑を開いて植木鉢のところに立てかけた。［Ｃ］視界から植木鉢は消えた。でもいくらそんなことをしても、鉢があることには変わりがなかった。それから母は何もいわなかった。そしてアケミもジャガイモの世話をすることはなかった。
ジャガイモの鉢を学校に持っていく日、アケミは手ぶらだった。途中で会った子たちから、
「植木鉢はどうしたの」
と聞かれると、
「枯れちゃった」
といった。面倒くさいから鉢は家に置いてきたのである。すると彼らは「ふーん」といい、それで事は済んでしまった。しかし学校では事は済まなかった。ジャガイモの鉢を持って来なかったのは、アケミ一人だけだったのである。先生はいつにもましてＢ目をつり上げて、

二〇二二年度　樟蔭中学校　入学試験　問題用紙（Ａ入試）【国語】

二〇二二年一月十五日　実施

※解答は解答用紙に記入すること。　〔六枚のうち　その四〕
※句読点（、。）や記号などは、すべて一字として数えます。

「いったい、どうしたの！」
と甲高い声を上げた。
「枯れました」
「枯れたって。みんなちゃんと世話をして芽を出してきたじゃないの。どうしてあなただけ芽が出ないの？　どうして植木鉢を持ってこないの？　観察日記は？」
先生は理科のノートを開いてみたが、ページは真っ白だ。
「何も書いてないじゃないの。困ったわね」
そーっとシゲコちゃんのほうを見ると、彼女は気の毒そうな顔をしてアケミを見ていた。先生は授業を始めた。アケミよりも漢字も読めず、ピアノも弾けず、給食も食べられず、すぐにぴーぴー泣くような子たちが、立派に芽を出させている。⑫どうしてこんなことになるのだと、反省もせずにアケミはずっと不愉快だった。

（「オトナも子供も大嫌い」群ようこ）

問一　傍線部㋐「ホウダイ」㋑「キョウミ」㋒「ショウバイ」㋓「ケワしい」㋔「モンク」のカタカナを漢字に改めよ。

問二　［Ａ］に当てはまる語として適切なものをあとのア～オから選び、記号で答えよ。
ア　積極的　　イ　圧倒的　　ウ　直感的　　エ　消極的　　オ　感動的

問三　傍線部①「面倒くさ」とあるが、アケミが植木鉢の世話を「面倒くさい」と感じる一番の理由は何か。文中から十字で抜き出せ。

問四　傍線部②「ない」と同じ働きをしているものをあとのア～エから選び、記号で答えよ。
ア　この町には図書館がない。　　イ　廊下は走らないようにしよう。
ウ　私の兄はまだ大学生ではない。　　エ　おさない妹たちの世話をする。

問五　傍線部Ａ「口をとがらせた」Ｂ「目をつり上げて」とあるが、この表情から読み取れる心情として最も適切なものをそれぞれあとのア～エから選び、記号で答えよ。
Ａ「口をとがらせる」　ア　不安がある　　イ　不満がある　　ウ　誇りがある　　エ　驚きがある
Ｂ「目をつり上げる」　ア　興奮している　　イ　驚いている　　ウ　怒っている　　エ　悲しんでいる

問六　傍線部③「誰も」がかかっていく（修飾している）部分をあとのア～オから選び、記号で答えよ。
㋐本人が　㋑何かしなければ　［誰も］　㋒世話を　㋓する人は　㋔いない

問七　傍線部④「アケミの声はだんだん小さくなった」とあるが、この時のアケミの気持ちとして適切なものをあとのア～オから三つ選び、記号で答えよ。
ア　これまでは何事もうまくこなしてきたアケミだったが、シゲコちゃんの鉢を見てはじめて自信を失いつつある。
イ　自分だけが宿題をしていない状況であるということを突き付けられ、周囲から取り残されているように感じている。
ウ　宿題をしていないことを、仲の良い友人であるシゲコちゃんに責められているように感じ、驚きつつも悲しんでいる。
エ　シゲコちゃんも自分と同じように宿題をしていないことを期待していたが、そうでないことが分かり、がっかりしている。
オ　一生懸命ジャガイモの世話をしているのに芽が出ず、自分の努力が報われないことに対してむなしさを感じている。

問八　傍線部⑤「芽が出るかなって心配してたんだけど、やっと出てきた」とあるが、シゲコちゃんはどのように植木鉢の世話をしていたのか。文中の語句を使い、三十五字以内で具体的に答えよ。

二〇二二年度　樟蔭中学校　入学試験　問題用紙（A入試）【国語】

〔六枚のうち　その五〕

二〇二二年一月十五日　実施

※解答は解答用紙に記入すること。
※句読点（、。）や記号などは、すべて一字として数えます。

問九　傍線部⑥「アケミはしばらくそこにしゃがんでいた」とあるが、この時のアケミの気持ちとして、最も適当なものをあとのア～エから選び、記号で答えよ。

ア　私のだけどうして芽が出ないのかな……。
イ　宿題はやりたくないけど、どうしよう……。
ウ　シゲコちゃんに世話を頼んでみようかな……。
エ　なんでこんなところに転がっているのかな……。

問十　傍線部⑦「買い物に……いうじゃないの」とあるが、アケミはなぜ宿題のことを母親に言わなかったのか。その理由が分かる部分をこれより前の文中より探し、その最初の五字を書け。

問十一　傍線部⑧「お姫様のような毎日」とはどのような毎日か。解答欄に合うように二十字以内で書け。

問十二　傍線部⑨「母は鬼のような顔で、部屋から見下ろした」で使われている表現技法をあとのア～オから選び、記号で答えよ。

ア　直喩　　イ　隠喩　　ウ　擬人法　　エ　体言止め　　オ　倒置法

問十三　傍線部⑩「そういうことは絶対にしたくなかった」とあるが、「そういうこと」とはどういうことか。最も適切なものを、あとのア～エから選び、記号で答えよ。

ア　負けを認めて、母の言っていることに従うこと。
イ　自分の間違いを認めて、怒っている母に謝罪すること。
ウ　自分のふるまいを反省して、母の前で涙を流すこと。
エ　心の中では反論しながらも、母に何も言い返さないこと。

問十四　傍線部⑪「机の上にはでーんと植木鉢が置いてあった」とあるが、ここから読み取れる母の心情として最も適切なものを、あとのア～エから選び、記号で答えよ。

ア　小さい頃から甘やかしてしまったアケミを心配しており、今日こそは厳しく接しようと決意している。
イ　他のクラスメイトはきちんとしている宿題を、アケミだけがしていないことが分かり悲しんでいる。
ウ　言うことを聞かないアケミと口を利きたくないが、せめて宿題だけはさせなければと思い焦っている。
エ　わざとアケミの目につくところに植木鉢を置き、宿題をしないアケミに対して怒りをあらわしている。

問十五　[B]、[C]に当てはまる語の組み合わせとして、適切なものをあとのア～エから選び、記号で答えよ。

ア　【B　さっそく　　C　念のため】
イ　【B　とりあえず　C　いちおう】
ウ　【B　さっそく　　C　いちおう】
エ　【B　とりあえず　C　念のため】

問十六　傍線部⑫「どうしてこんなことになるのだと、反省もせずにアケミはずっと不愉快だった」について、あとの問いに答えよ。

（1）「こんなこと」とはどのようなことか。最も適切なものをあとのア～エから選び、記号で答えよ。

ア　普段自分より出来が悪い子たちが出来ていることを、自分だけが出来ていないという状況。
イ　漢字やピアノではなく、何の役にもたたないジャガイモの世話を宿題としてさせられる状況。
ウ　シゲコちゃんのような全然友達のいない子に、気の毒そうな顔をして見られている状況。
エ　先生に怒られないよう気を付けていたのに、クラスメイトの目の前で怒られている状況。

（2）「不愉快だった」とあるが、アケミはなぜ不愉快なのか。最も適当なものをあとのア～エから選び、記号で答えよ。

ア　自分の辛い気持ちを誰も理解してくれないから。
イ　母親からの愛情を感じることができないから。
ウ　周囲とうまくコミュニケーションをとれないから。
エ　自身のプライドを傷つけられたと感じたから。

※解答は解答用紙に記入すること。
※句読点（、。）や記号などは、すべて一字として数えます。

問十七　本文の内容として適切なものに〇を、適切でないものに×を書け。

ア　最初はやる気で熱心に世話していたアケミも、なかなかジャガイモの芽が出ないため途中で水をやるのを止めてしまった。

イ　アケミはピアノが弾けることや、成績優秀であることを鼻にかけていたため、クラスメイトたちからは嫌われていた。

ウ　お母さんは、ジャガイモの世話をしないアケミにあきれながらも、汚れた植木鉢を庭から机まで運び宿題を手伝おうとした。

エ　植木鉢の世話を全くしていなかったアケミは、少し周りの様子が気になってシゲコちゃんの家に様子をうかがいに行った。

オ　学校にジャガイモの鉢を持って行く日、植木鉢の世話をせず、鉢を持って来ていないのはクラスでアケミだけだった。

【二】　あとの問いに答えよ。

問一　次の漢字の部首をあとのア～コから選び、記号で答えよ。

①　礼　②　間　③　複　④　病　⑤　都

ア　しめすへん　イ　りっとう　ウ　にすい　エ　りっしんべん　オ　おおざと

カ　やまいだれ　キ　まだれ　ク　もんがまえ　ケ　にんべん　コ　ころもへん

問二　次の故事成語の意味として、適当なものをあとのア～カから選び、記号で答えよ。

①　蛇足　②　切磋琢磨　③　助長　④　蛍雪の功　⑤　五里霧中

ア　互いに学問や人格の向上に励（はげ）むこと

イ　むだな行い、余計なもの

ウ　苦学しながら学問に励み、成功すること

エ　物事に迷い、思案にくれること

オ　手助けをしてかえって害すること

カ　人生のはかないこと

問三　次の傍線部の漢字が正しければ〇を、正しくなければ正しい漢字に改めよ。

①　左右対照の図形。

②　父は市役所に努めている。

③　犬の散歩が習慣になった。

④　高層ビルが立つ。

⑤　クラブの部費を納める。